様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３３９

研究課題名（和文）アフリカの彫刻家エル・アナツイの見直しと脱欧米中心的な新しい美術論の創出

研究課題名（英文）Reviewing An African Sculptor El Anatsui to Approach a new De-Eurocentric Framework of Art and Art History

研究代表者
川口　幸也（KAWAGUCHI, YUKIYA）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：３０３７０１４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：ナイジェリアの地方都市ンスカを拠点に、地域の歴史と文化を踏まえて世界的な活躍を見せる彫刻家エル・アナツイの声望は今日ますます高い。本研究は、アナツイの作品の独自性が、制作に携わる作業員との共同作業を通した、地元の共同体との密接な繋がりに根差していることを詳細かつ包括的に解明した。一方で、老境にあるアナツイの遺産を次の世代がどう受け継ぐのか、また、美術館など、依然として未整備な芸術文化のインフラをどう整えていくのかといった、今後への課題があることも明らかにした。
近い将来、アフリカの経済発展が見込まれる中、自らの芸術文化を、アフリカの視点で語っていくという営みが極めて重要な意味を持つと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
エル・アナツイの作品はどれも、制作に携わる地元の作業員との共同作業の成果である。その作業の過程は、アナツイの作品が土地の歴史と文化に深く根ざしている事実を裏書きしている。本研究は、そうした共同作業の過程が、彼の作品に際立った独自性をもたらしていることを実証的かつ包括的に明らかにした。この成果は、内外を問わず、今後の芸術文化の在りようを考える際に、学術的にも社会的にも大きく貢献するだろう。この先、本研究による新たな知見を多彩な機会に発信し、広く共有することを通して、エル・アナツイおよびアフリカの同時代美術への関心が高まり、ひいては美術という枠組みが欧米を超えて多元化していくことが期待される。

研究成果の概要（英文）：El Anatsui,an African sculptor based in Nsukka,Nigeria,has been developing a worldwide activity in the global artworld. His reputation as a contemporary artist has grown so high today. Through my study this time,I have made it clear that his artworks are the product of the teamwork with his supporting staff working together and living nearby. But,on the other hand, some problems have been revealed. First of all,the artists of the next generation, how will they succeed to a great heritage from El Anatsui, who is now at the mid-70 years old?　Then how will be provided cultural infrastructure including art museums, which cannot be said to have well equipped in Africa. While a rapid economic growth is expected for the future Africa, it will be quite important to keep the selfmade media to represent their own arts and cultures from their proper viewpoint.

研究分野：アフリカの同時代美術、展示表象論

キーワード：アフリカの同時代美術　エル・アナツイ　固有の歴史、文化　地声のかたり　文化的インフラの整備

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

グローバルな活躍を見せるナイジェリアの彫刻家エル・アナツイ（1944－）は、近年、欧米を中心に現代美術の分野で極めて高く評価されている。日本でも 2010 年から翌年にかけて、国立民族学博物館をはじめとする国内 4 会場で大規模な展覧会が行われて評判になった。だが、世界的に見て、美術一般に対する見方は依然として欧米中心的であり、日本でもその傾向は根強い。アナツイへの、ひいてはアフリカ美術への関心も、一時的にはともかく、それほど持続的で大きな広がりがあるわけではなかったということができる。

２．研究の目的

エル・アナツイは、ナイジェリア南東部の小さな町ンスカに工房を構え、ワインやウイスキーの瓶のアルミキャップを素材にして、大きな織物状の作品を造り続けている。そうしたアナツイの作品の独創性、独自性の根源がどこにあるのか、何に由来するのかを明らかにすることが第一の目的である。次いで、そのことが、欧米を主流とするいわゆる現代美術の世界でどのような受け止め方をされているかを検証、考察することが二つ目の目的になる。そして、かりに欧米で、アナツイの作品が他の現代美術の作品と同じような文脈で高い評価を得ているのであれば、本研究の成果として、そのような欧米の美術史に基づいた評価ではなく、別の評価の基準、枠組みを提示できる可能性が生まれてくる。それが、本研究の究極の目的であった。

３．研究の方法

アナツイは、ンスカの工房で常に 30～40 人ほどの助手を雇って、作品を制作している。そこで、まず、(1) 現地のンスカで、彼らがどのような意識で仕事をしているのかを、できるだけ詳細に聞き取り調査を行う。次に、(2) アナツイ本人にインタビューを行う。同時に、(3) ンスカの町の人々にアナツイがどのように受け止められているかを調査する。また、(4) ナイジェリアの美術界で彼がどのような位置を占めているかを調査する。これらとは別に、(5) 英米をはじめとするヨーロッパとアメリカで、彼の作品がどこでどのように展示されているかを調査する。これらの調査を基に、アナツイとその作品の特質と位置づけについて多面的に考察する。

４．研究成果

アナツイの工房では、いつも 10 人から 20 人ほどの助手が、ワインやウイスキーの瓶のアルミキャップをつなぎ合わせて、風呂敷ほどの大きさの作品のパーツ（モティーフ）を作っている。助手はすべて男性で、年齢は 20 代から 40 代、学生もいれば、いくつかの仕事を兼ねている人もいる。助手は最近増えつつあり、総勢で 40 人前後いて、入れ替わり立ち替わり工房にやってきては自分に割り振られたパーツを作る。最後に、これらのパーツを床の上に並べて組み合わせ、たてよこ優に 10 メートルを超えるような巨大な織物状のひとつの作品に仕上げる。組み合わせのアイデアを提示するのはアナツイである。スマホやタブレットが登場してからは、アナツイはそれらを使って制作中の作品の写真を撮り、試行錯誤しながら、作品全体の構成や色の配置を決めている。そして、逐一、助手たちに指示を出して作品を造り上げていく。

工房で大勢の助手を使うというこの方法は、地元の人たちから見れば、一定の雇用を生み出してくれるということになる。そして、働く助手の立場に立つと、空いた時間を利用して仕事をし、そこそこの収入を得ることができるわけだから、生活上はたいへん有益なシステムだということになる。

もとより、アナツイの作品の根本にあるのは、彼が生まれ育ったガーナの伝統的な特産品であるケンテクロスである。アナツイは、そのケンテクロスを、廃品を素材にして、もっと大きな規模で現代に蘇らせているということができる。一般にアフリカでは、ケンテクロスも含めて、布はそれを身に着ける者の社会的な地位や精神的な高貴さを表す象徴的な存在である。アナツイの織物状の作品も、単なる造形物であることを超えて、アフリカ人の伝統文化の豊かさと、それに基づく誇りを表現しているのだ。

以上のことから、アナツイの作品は、単に西アフリカの文化的伝統を踏まえた美術品というだけではなく、経済的、社会的、また文化的な文脈において、地域の人たちとの共同作業の成果だということができる。換言すれば、アナツイの作品は、ガーナやナイジェリアといった西アフリカの歴史や文化、風土に深く根ざしており、その独自性、独創性はまさしくこの点にある。

さて、アナツイの作品の美術的価値について、ナイジェリアを含む西アフリカでは、アナツイの周辺にいる町の人たちはそれが何であるかを全くといっていいほど理解していない。これは、一緒に作業をしている助手たちも例外ではない。彼らは与えられた仕事をこなして、賃金を得ているだけである。アフリカで、アナツイの作品を現代美術として認識しているのは、ギャラリーや大学に身を置く、ごく一握りの専門の美術関係者だけである。一方、ヨーロッパやアメリカでは、やはり同じように美術品として高く評価され、大英博物館やポンピドゥ・センター、メトロポリ

タン美術館、ニューヨーク近代美術館といった多くの著名なミュージアムに購入され、展示されている。そこでは、基本的には、欧米流の美術史の視点から、今日のアフリカを代表する現代美術の作品として扱われている。また、観衆の側からも、そのように受け止められている。
したがって、エル・アナツイの織物状の作品の価値評価と位置づけをめぐっては、西アフリカの共同体の歴史、文化、風土を踏まえて、別の枠組みを通してかたり直す余地が十二分にある、ということになる。これによって、欧米を軸にした近現代美術の物語の中でかたるのではなく、西アフリカの歴史に基づいた独自の美術史の物語を提示することになるのである。美術をめぐる、新たな、もうひとつの物語が立ち上がってくる可能性がそこから見えてくる。それこそが、本研究の最も大きな目的であり、成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川口幸也	４．巻 165
２．論文標題 「戦後日本社会と《太陽の塔》」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『季刊　民族学』	６．最初と最後の頁 38－43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口幸也	４．巻 6
２．論文標題 「ポリタンクと仮面舞踏をつなぐもの」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭2018』図録	６．最初と最後の頁 86－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口幸也	４．巻 vol.71, no.1076
２．論文標題 「かたり始めるアフリカ―ラゴスのアートシーンの確かな息吹」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『BT(美術手帖)』	６．最初と最後の頁 202-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口幸也、Lauren Greenfield, Pascal Beausse, Frank Horvat, India Dhargalkar, Francois Cheval, Patrick Mauries, Simon Baker, Philippe Bergonzo, Mark Sealy, Gonzalo Golpe, K-NARF	４．巻 1
２．論文標題 「ポリタンクと仮面舞踏をつなぐもの」（和英）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 KYOTOGRAPHIE 2018 Catalogue （展覧会図録）	６．最初と最後の頁 86－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 川口幸也、Lauren Greenfield, Pascal Beausse, Frank Horvat, India Dhargalkar, Francois Cheval, Patrick Mauries, Simon Baker, Philippe Bergonzo, Mark Sealy, Gonzalo Golpe, K-NARF	4．巻 1
2．論文標題 作家解説「ロミュアル・ハズメ」（和英）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 KYOTOGRAPHIE 2018 Catalogue （展覧会図録）	6．最初と最後の頁 86－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 川口幸也	4．巻 165
2．論文標題 「いま、岡本太郎と太陽の塔に何を読みとるか」（近刊）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『季刊　民族学』	6．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川口幸也	4．巻 62
2．論文標題 美術館という儀礼の場―キャロル・ダンカン氏の研究から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 MOUSEION（立教大学博物館研究）	6．最初と最後の頁 17－18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 川口幸也
2．発表標題 「複数の語りの共存をめざして－アフリカの同時代美術の30年」
3．学会等名 世田谷美術館
4．発表年 2018年

１．発表者名 川口幸也
２．発表標題 「エル・アナツイと世界の織物」
３．学会等名 放送大学　稲賀繁美『日本美術史の近代とその外部』第14回
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 池谷和信、川口幸也、竹沢尚一郎ほか	４．発行年 2017年
２．出版社 国立民族学博物館	５．総ページ数 136（125）
３．書名 『ビーズ―つなぐ　かざる　みせる』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考